様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2016
課題番号：２６５８００５０

研究課題名（和文）公共圏と女性たちの経済意識―イギリス近代女性文学における社会史的研究モデルの構築

研究課題名（英文）The Public Sphere and Women's Economic Ideas: Constructing a Model of Sociological Research in Women's Literature of Modern Britain

研究代表者
大石　和欣（OISHI, Kazuyoshi）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：５０３４８３８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は19世紀前半のイングランドにおける女性の慈善活動において、女性たちの経済意識の歴史的意義を、文学作品を通して実験的に考究したものである。19世紀初頭の奴隷貿易廃止運動において、女性たちは奴隷たちの労働の産物である西インド産の砂糖をボイコットする一方で、ウェッジウッドの反奴隷貿易キャンペーン用のカメオを購入した。矛盾するような慈善をめぐる消費活動は、同時代の文学作品にも頻繁に考察できる。調査の後半はエリザベス・ギャスケルとハリエット・マーティノーとの言説において、家政の延長線上としての公共圏での事前活動における女性たちの経済意識の軌跡を辿ろうと試みた。

研究成果の概要（英文）：This project is a pilot research on the historical significance of economic thought to the philanthropic activities conducted by women in early-nineteenth-century England and how it is represented in the literature of the same period. Heavily involved in the Abolitionist movement at the beginning of the century, women initiated the boycott of sugar consumption, while eagerly purchasing Wedgwood cameos as a sign of their politico-economical stance against the slave trade. Women’s keen sensitivity to economy reflects itself in the contemporary Abolitionist literature. The research from the summer of the second year centred around Elizabeth Gaskell and Harriet Martineau, whose writings redressed the contemporary male Unitarians’ idea of free trade, emphasising mutual interdependence of the employer and labourers and expanding women’s economic activities into the public sphere, where women sought to regulate the balance of spending and securing income in philanthropic activities.

研究分野：イギリス文学

キーワード：イギリス文学　経済思想　フィランソロピー　慈善　消費文化　女性　オイコノミー　奴隷貿易廃止運動

１．研究開始当初の背景

本研究は応募者が慈善をテーマにしたイギリス女性小説を読むなかで浮びあがってきた問題点を出発点としている。たとえば Mary Wollstonecraft の中編小説 *Mary*（1788 年）において主人公が直面する問題は、夫から独立し、社会的責務である慈善活動を自由に行いたいと望みながらも、離婚すれば慈善を行うための経済的基盤を失ってしまうというジレンマである。法的に財産所有権のない彼女にとって財産は自己実現のための手段でありながらも、同時に夫への依存を強制する桎梏でもあった。拙劣な感受性小説として片付けられる *Mary* であるが、政略結婚に抵抗しながらも、夫を拒否すれば経済的存立基盤の喪失、ついで慈善家としての自己定義の崩壊に到ることに怯え続ける主人公の境遇は、とりわけ 19 世紀の前半の女性たち、つまり 1870 年と 1882 年の既婚女性財産法成立まで法律上経済的自立が不可能だった女性たちの不安と不満を反映した政治的作品として読むことが可能であろう。財産に対するねじれた女性の意識は、Harriet Martineau の *Illustrations of Political Economy*（1834 年）などにも共有されている。財産は女性たちの消費や社会活動を支える基盤でありながら、その運用に際しては常に父権主義的社会に対して説明責任を負うことになり、その制約が彼女たちの経済意識を形作っていたのではないかと考えた。

２．研究の目的

本研究は、1780～1830 年代における社会活動をテーマにした女性文学作品のなかで、女性と公共圏をつなぐ連結点（nexus）として財産がどのようにとらえられ、機能しているかを捕捉し、女性の問題として社会史的な観点から研究する可能性を検証した。この時代の女性作家たちの作品には消費や社交、社会活動に絡んで財産の問題が浮びあがっている。女性たちにとって、資産は生活・消費のための財源であるが、同時に社交や慈善など社会的責務を営むために必要であり、それらを通して自らの社会的アイデンティティを構築するために不可欠な基盤でもあった。しかし、1870 年および 1882 年の既婚女性財産法の成立まで私有財産を認められなかった女性たちにとって、経済的独立は不可能に近く、法的には夫や男性親族の管理下でしか消費活動、社交、社会活動のいずれも認められていないために不満とジレンマを生むことになった。いわゆる消費社会が出現し、社会的流動性が高まるなかで、経済的束縛を受けた女性たちがどういう経済意識を持って消費行動や社会活動に臨み、公共圏に関与したか、その位相を文学研究として行う基礎固めを行った。

３．研究の方法

これまでに 1780～1800 年代の女性慈善小説の代表例は読んできたが、経済意識という切り口ではいため改めて再読は必要であり、そうしたテクストの読解が基本となる。そのうえで、同時代の歴史的な資料から、女性史として女性と財産の関係を明らかにしていくアプローチをとる。3 年間ですべてを網羅的にカバーするのは不可能であると考え、代表的な例として 1807 年の奴隷貿易廃止運動に関わる女性の活動にまず焦点をあて、そのなかで財産管理、消費、慈善がどのように結び合っているかを考察した。それが奴隷貿易廃止運動に関連する女性の言説のなかにどのように浮かびあがってくるかを考察した。その後、ユニタリアン派の牧師の妻であり、作家でもあったエリザベス・ギャスケルの小説を軸にして、男性ユニタリアンによる自由貿易や経済についての言説とギャスケルがどのように距離を取り、女性の経済意識を考えているかを考察した。最後に、ハリエット・マーティノーの経済論についても、ユニタリアン派と比較しながら考察したが、時間的限界もあり、同時代の女性たちに広く受けいれられた彼女の経済観がどのように彼女たちに受容されていったかまでは辿ることができなかった。

４．研究成果

【平成 26 年度】

18 世紀における消費文化と女性との関係を考察しながら、両者の関係が女性による奴隷貿易廃止運動のなかにどのように表出し、言説化されているかを吟味し、同時に 19 世紀半ばに活躍したユニタリアン小説家ギャスケルの小説中の女性たちの経済観を考察する研究に年度末には着手した。

奴隷貿易はヨーロッパとアフリカ、アメリカ大陸の間で行われた三角貿易の一要素であり、玩具、砂糖、タバコ、機械工業品などの奢侈品の流通と不可分に結びついたものである。同時に、国内における余剰資本の投資を原動力の一つとし、貿易による利益が資本として国内に還元されていく過程をたどった。多くの女性たちが関与した奴隷貿易廃止運動は、砂糖の不買運動など奢侈品の消費を抑制することを目標に掲げていたことの意味を解きほぐした。その一方で、チャリティは一種の贈与とみなすことも可能であり、この時代において慈善団体への豊富な資金が集まりながら、非効率なチャリティ活動しかできなかったことへの批判が女性たちから噴出することになる。

【平成 27 年度】

平成 27 年度はエリザベス・ギャスケルの言説を中心にして調査を進めた。19 世紀前半の資本主義およびマンチェスターの資本家の多数を占めるユニタリアン派の産業資本家たちの立場と言説との比較が主な目的であった。19 世紀初頭より綿工場を基軸として急速な産業都市へと成長したマンチェスター

では、資本の集中と投資熱の高まりが顕著であった。その一方で貧困と住居環境の悪化が深刻化していた。ユニタリアン派の信徒たちはそのなかでも中心的な存在として、そうした公的活動や教育に関与していた。ユニタリアン派の牙城となっていたのが、クロス・ストリート礼拝堂であり、その牧師補をつとめていたのが、ギャスケルの夫となったウィリアム・ギャスケルである。

エリザベス・ギャスケルの小説および書簡、活動からは、女性たちが男性たちの活動と並行して、女性たちが慈善や教育の領域において積極的に関与していくことを肯定的にとらえる姿勢が明瞭に浮かびあがってくる。勤勉と独立を美徳として訴える女性たちの言説には、資本という言葉や概念を用いられないものの、産業活動や投資活動を否定するのではなく、人間同士の関係を構築し、社会を活性化させていく基軸としての金銭という考え方があり、カーライルが批判する「金銭関係」（cash nexus）という概念を再構築し、より人間的な関係として置き換えていく傾向がうかがえる。その中心に女性たち自身が置かれている。「家庭の天使像」というヴィクトリア朝的な反経済的女性像では捨象されがちな経済観が明瞭に潜在している。

【平成 28 年度】

最終年度は、前年度のギャスケルについての論考を取りまとめながら、1820 年代から活躍するハリエット・マーティノーにおける経済観を調査した。ユニタリアンであり、マルサスの経済論・人口論にも傾倒した彼女は、女性にとっての家政の重要性を説いた。家庭という枠組みを強調しながらも、一方で国家経済を論じることで両者の関係性を間接的に示唆している。奴隷貿易廃止運動にも積極的に関わることで、家政の延長線上にあるべき慈善が消費や国家経済とも結びついていることを認知し、また浸透させた点で経済を媒介にした女性と公共圏の位相を例示する存在である。教育や地域における慈善活動を通して、曖昧な親密圏と公共圏の枠組みのなかで家政や経済が女性によって捕捉するのを助長した。マーティノーの言説には財産についての言及も多く、世紀後半の既婚女性の財産を認める法改正につながる萌芽も観察できる。しかしながら、広範囲に受けいれられた彼女の経済観が同時代の女性たちの経済観を形成するのにどれほどの影響力を及ぼしたのかについては、具体的な調査まで踏み込む時間が足りなかった。

【総括】

この時代の中流階級以上の女性たちにとって、資産は社会的体面を保つための社交や結婚、奢侈品の消費の基盤であることは確かだが、それはこれまでの文学研究が指摘する家庭空間に限定すべきものではない。ユルゲン・ハバーマスが経済は家庭と公共圏との間の壁を貫通して横切っていると述べたように、社交や消費を通して公共空間とを接続する起点となり、さらに篤志協会や地域奉仕などの慈善活動や文化的活動を通して行う社会的な責務も支える。近年の社会史研究では、国や自治体から政治的に疎外されていた女性たちにとって、慈善は社会活動であり、市民社会に帰属する立派な公共圏として機能していたことである。女性たちにとって財産は消費や社会活動を通してそうした公共圏に参入するための重要な経済基盤であった。

また、女性たちにとって家庭という私空間と公共圏との関係は、いわゆる分離領域（separate spheres）論で峻別できない曖昧なものであった。彼女たちにとっての公共圏は、おもに社交、消費活動、教育、そして地域における慈善活動に限られたものであったが、それらはいずれも家庭あるいは家政の一端として捉えられていた。法的には扶養家族（dependent＝隷属者）として見なされ、社会的には家庭空間に帰属する存在とみなされていた女性たちは、それを逆手にとるようにして社交、教育、慈善を家庭空間の延長線として位置づけることで、行動範囲の拡大を試みたのである。とくに、困窮家庭の訪問、日曜学校など貧困子女の教育、出産の際のリネン提供といった慈善活動は、「家政」という中流階級女性たちの領域の範囲を逸脱することなく堂々と関与できた社会活動であった。

この時代の女性による言説には、慈善を家政（oeconomy）という美徳の延長線上に位置づけている例があるが、それは独立したホモ・エコノミクス (homo economicus)としての男性が関与する国家規模の経済（economy/political economy）と対比された女性独自の公共圏構築への野心と経済意識を表象している。ときには、奴隷貿易廃止運動、奴隷制廃止運動に見られるように、こうした女性たちの慈善活動が、国家経済をも左右する政治的意義を担うことさえある。いわゆる「家庭の天使」像では捨象されてしまう女性たちの社会活動と経済意識が財産と公共圏に関する言説研究から見えてきた。

そして家政の美徳は、Adam Smith の『国富論』や T. R. Malthus の人口論、Bentham の功利主義などいわゆる近代的な経済学（economics）や政治経済学（Political Economy）が興隆し、社会に浸透していく時代にあって、それと対置されつつ新しい女性独自の経済学へと変容していくことになったと考えている。Elizabeth Gaskell や Harriet Martineau の著作から浮かびあがる女性の経済観は、通説で言うように男性的な政治経済学を女性の領域に翻訳したものではなく、むしろ女性的な家政の美徳を政治経済の文脈ななかで再定義を試み、女性の経済意識を新たなものに書き換える意図を持っていた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３　件）

① 大石和欣、人文学の瓦礫と天使、『読書人』、査読無し、5/22 号、2015 年、p.7

② 大石和欣、古書の言葉と未来の展望、『日本古書通信』、査読無、1033 号、2015 年、pp.4-5

③ 大石和欣、ヴォランタリズムとジェンダー　―　文学と歴史の境域、『ヴィクトリア朝文化研究』、査読有、第 12 号、2014、pp. 27-34

〔学会発表〕（計　５　件）

① 大石和欣、イギリス貴族の凋落とカントリー・ハウスの記憶、広島日英協会（招待講演）、2016 年 7 月 29 日、ANA クラウンプラザホテル広島（広島県広島市）

② 大石和欣、ホームズと金之助―フラヌールになれなかった郊外の語り部たち、名古屋大学英文学会（招待発表）、2016 年 4 月 16 日、名古屋大学（愛知県名古屋市）

③ 大石和欣、ギャスケル v. ギャスケル　―　ユニタリアン男性たちの言説とユニタリアン女性たちの公共圏、ギャスケル協会年次大会、2014 年 10 月 4 日、明治大学（東京都千代田区）

④ 大石和欣、Keats, Pre-Raphaelites, and Japanese Aesthetes in the Ages of Consumerism、「消費文化学会」、2014 年 9 月４日～6 日、学習院大学（東京都豊島区）

⑤ 大石和欣、Keats, Pre-Raphaelites, and Japanese Aesthetes、Romantic Connections, 2014 年 6 月 13 日～15 日、東京大学（東京都文京区）

〔図書〕（計　１　件）

① 大石和欣（共著）、『18 世紀の味―好みの誕生と舌先の人文学』（韓国語）、文学村（韓国）、2014 年、317pp.

〔産業財産権〕

該当せず

６．研究組織
(1)研究代表者

大石 和欣（OISHI, Kazuyoshi）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：50348380